

---

# バカと天才と音楽家

鍵山雛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと天才と音楽家

### 【NZコード】

N4044W

### 【作者名】

鍵山雛

### 【あらすじ】

それは、文月学園に起こるある波乱・・・

クラスに来たのは天才だった

だけど・・・自分は召還戦争には出られない

昔は頭が悪かった。でも・・・帰つて来た彼は天才だった  
幼馴染の彼女には思い出して欲しかった・・・

それが・・・自分の願いだから

そのために・・・自分は全てを偽つて文月学園に来たのだ  
そう・・・幼馴染の木下優子に会うために

あの約束を果たすために

そして・・・約束の曲を奏るために

自分はいるのだから・・・

そう・・・この俺 神山新一 が来たのだから

## プロローグ

Dear sisuter  
My Shinichi 「koto」 Kamiyama sa  
ys that it wants to ask to go  
to the school in Japan named t  
he educational institution in  
July in Japan for giving the sp  
lendid graduation at a short p  
eriod of only four years as th  
e top from M.I.T. << .

### 翻訳

拝啓 姉上

私こと神山新一はM.I.T. マサチュー・セツツ工科大学 を見事にわずか四年という短い期間で飛び級首席卒業したことをお許しください  
つきましては日本にある文月学園という日本の学校に行く事をお願いしたいと申します

「はあ～また日本に帰ることができるのか」  
そう・・・これが今作の主人公神山新一である。

現在・・・飛行機の中

「やばい・・・酔った 気持ちが悪い」

ムードがブチ壊しである

「早く日本に着かないかな」 そうだ…C・Aを呼ぼう すみません

ん

「はい…お客様 ビックリしましたか?」

「気分が悪いので少し寝るので日本に着いたら起きて貰えませんか?」

「わかりました」

そして…新一は眼を閉じた

「なあ…優子」

「なによ…」

「俺…来週からアメリカに行くんだ」

「え? 何でよ?」

「(このままじゃ 優子にふさわしい男になれないから…色々鍛え  
ようと思つて) 体と知識を」

「嫌! 新一がいなくなるのは嫌!」

「それも困るんだよな~ 大学からの推薦状が来ていてさ~」

「大学? なんで? あんた私よりバカじやないの?」

# 新一の心に何かが刺さった

「うーー。いやー、俺がなんでだらうと言いたいでも・・・。ビリせ見学とかじやない?」

「 そ う だ よ ね ． ． ． 新 一 が 行 け る 訳 が 無 い も ん 」

「それは……醜いな」

一  
絶妙ノハナトニ

そこのよね、俺かしきなり大学なんてどこの漫画みたい。。。

「おれのいの画」

それ以上は、  
三田町

一 また明日ね

「あ！ そうだ・・・俺のバイオリンの歌詞をやるよ俺の一一番得意な奴のそれと俺の鍵を」

「それはいいよ・・・どうせ私は音楽はダメですよーだ」

「姉上、何処じやう」

「ああ……優子の弟か~優子を探しに来たんだろうな」

「秀吉めえ～後で覚悟をしてなさいよ～」

「優子・・・また関節技を決めるのか？」

「でも・・・その前」

「その前に？」

「あんたを絞めるわ」

「なんで～？」

「私にもつと前に言わなかつたから」

「優子、俺の腕はそつちには曲がらないぞ ギヤアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアア腕は止めてせめて足に」

「問答無用」

「ギヤアアアアアアアアアアアア」

「あつ姉上じじてそんな所にあるのじや～？」

「秀吉・・・助けて」

「すまんのじや～・・・新一」

「一週間後

「優子これでさよならだな・・・」

「わよな、いじやないわよ・・・全く」

四年たつたらまた帰つて来るよ」

「絶対よ私と同じ高校に入りなさい  
そして・・・あなたの曲をまた聴かせなさい」

「姉上は全く仕方が無いのう」

「秀吉」いわよさるわい

「いわゆる秀吉の分際で」

四年後また優子達と共に戻られるかな・・・」「

「流石・・・優子だ四年後また会おう  
あっそろそろ時間だ」  
俺が恋した幼馴染の優子

「恥ずかしいじゃない」

「絶対・・・優子を見つける！四年後に屋上で自分のバイオリンの音が優子に届くように奏でるよう！」

そして俺は空港に行きアメリカ行きの飛行機に乗つて

「こやぢ・・・アメリカに うつ『気持ち悪い』

ものすいへぬのである・・・

やつてしまつた

## 文月学園に新一入学

そして・・・四年の月日が流れ

私・・・木下優子は文月学園一年生である

今日が新一がアメリカに行つてから丁度四年になる

「やして・・・私は色々と変わりました」

「姉上・・・なんじや起きておつたのか」

「秀吉 なに?私が早く起きて悪い?」

「何でもないのじや・・・」

「丁度・・・今日が新一と再会する四年だからね

「わうじやな・・・やっぱり新一は姉上と回じAクラスじやうひ

「Aクラスで会えるといこな~」

「姉上なんか怖いのじやが・・・」

「秀吉よつといひちこ来なきこ

「ちよ・・・姉上痛いのじや

「うれし・・・あらわん学校行くわよ

「そうじやな・・・」

「そして・・・私は新一からもらつた鍵を首にかけて学校に向かつた今日は振り分け試験の日だからだ」

その「る・・・新一は

「なんで?お前さんがこの学校に入つてくるかね~」

学園長室にいた

「何か問題でも?」

「教師として入つてくれるのだったら分かるがまさか・・・生徒として入つてくれるのは予想外だつたからな」

「すみません・・・でも極力本気は出しません」

「それでもな・・・どのクラスに入れても圧倒的だしな・・・」

「その問題なら・・・Fクラスでも構いません 最悪・・・生徒指導・学園長の許可がでないと召還ができなくて構いませんからお願いします」

「私もあんたみたいなのが入つてくれるのは嬉しいんだがね・・・振り分け試験で4教科合計一万越えは流石に学園長でもどうしようがないよ」

「そこを何とかできませんか?」

「でも・・・MIT主席を「クラスに入れるとなると流石に気が引けるんだよね・・・」

「なら貴方にこの鍵を渡します」

「何だこの鍵は?」

「私のコミッターを解除する鍵です」

「一体なんだい?そんなものを出して?」

「この鍵が無ければ私は本気になれません力ずくでもその鍵が無いと誰もこのコミッターを外すことはできません」

「で・・・その鍵を現在持つてこるのは私と他には」

「生活指導の西村先生とAクラス木下優子のみです」

「その・・・コミッターを解いたらどうなる?」

「自分のRQ還元が現在の点数の状態でRQ還元されます」

「もし・・・その状態になつたら?」

「最悪・・・クラスのRQ還元の点数が二三千点上がります」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「あつ・・・でも・・・生徒指導・学園長のどちらかが承認しないと出ませんよ」

「あなたは当分の間試合戦争に関係ある行為を固く禁止する そして・・・」クラスに入る事とする」

「わかりました・・・でもクラスに行く前に2つお願いを聞いてくれませんか?」

「なんだい? 言つてみな」

「まず一つは還暦がだめなら西村先生と共に戦死者の補習を手伝つてもよろしくですか?」

「それは構わん」

「もう一つは・・・屋上でバイオリンを演奏する」とを許可できませんか? ある人との約束なんですよ」

「なんだ・・・そんな事かい そんなこと聞くな毎回好きなんだ引くところ」

「ありがとうございます」

新一は学園長に向回も頭を下げた



## 文月学園に新一入学（後書き）

いつも・・・最近バカテスと口つきゅーふに異常にはまつてゐる作者です

これからもよろしくお願いします

## 演奏と屋上と幼馴染（前書き）

問・以下の英文を訳しなさい

This is the bookshelf that my grandmother had used regularly

姫路瑞樹の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか

吉井明久の答え

「 \$ # --」

教師のコメント

出来れば地球上の言葉で

神山新一の答え

「私の祖母の人生が本棚です」

教師のコメント  
どうひつじゅを入れるべきか悩みます

問・以下の問いに答えなさい

「goodやbadの比較級と最高級をそれぞれ書きなさい」

姫路瑞樹の答え

「good - better - best  
bad - worse - worst」

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

「good - gooder - goodest」

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。goodやbadの比較級と最高級は語尾に -erや -estをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

「b a d - b u t t e r - b u s t」

教師のコメント

「悪い」「乳製品」「おつぱい」

神山新一の答え

「面白いボケが浮かばない」

教師のコメント

回答にボケは必要ありません

問・下の文章の（ ）に正しい答えを入れなさい。  
光は波であつて、（ ）である

姫路瑞樹の答え

「粒子」

教師のコメント

よくできました

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

「勇者の武器」

教師のコメント

先生もRPGは大好きです。

神山新一の答え

「虫眼鏡を使うと危険」

教師のコメント

それで太陽を見ないでください

問・以下の間に答えなさい  
「ベンゼンの化学式を書きなさい」

姫路瑞樹・神山新一の答え

「じゆこう」

教師の「メント  
簡単でしたかね。神山君は真面目にやつましが。

土屋康太の答え

「ベン + ゼン = ベンゼン」

教師の「メント

君は科学をなめていませんか?

吉井明久の答え

「B - E - N - N - E - N」

教師の「メント

後で土屋君と一緒に職員室に来るよ。

問・以下の問いに答えなさい

「(1)  $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を一つ答えなさい。

(2) ?  $\sin A + \cos B$  ?  $\sin A - \cos B$  ?  $\sin A$  -  $\cos A$

$s_B + \cos A \sin B$

姫路瑞樹の答え

「(1)  $X = -6$   
(2) ?」

教師の「メント

「そうですね。角度を「。」ではなく「」で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

「(1)  $X = \text{およそ} 3$ 」

教師の「メント

「よそを付けて」まかしたい気持ちも分かりますが、これでは解答に近くても点数は上げられません。

吉井明久の答え

「(2) よよせ?」

教師の「メント

「先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを付ける生徒は君が初めてです。」

問・以下の間に答えなさい

「女性は（ ）を迎えることで第一次性徴期になり、特有の体つきになり始める」

姫路瑞樹の答え

「初潮」

教師のコメント  
正解です。

吉井明久の答え

「明日」

教師のコメント

「いぶんと急な話ですね。」

土屋康太の答え

「初潮と呼ばれる、生まれて初めて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達する頃に初潮を迎える者が多い為、その訪れつ年齢には個人差がある。一本では平均12歳。また、体重

の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される」

教師のコメント  
詳しそぎです。

神山新一の答え  
「分かりません」

教師のコメント  
君なら簡単なはずです

問・以下の良いに答えなさい

「人が生きていく上で必要となる五大栄養素を答えなさい」

姫路瑞樹の答え

「脂質・炭水化物・タンパク質・ビタミン・ミネラル」

教師のコメント

さすがは姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

「砂糖・塩・水道水・雨水・湧き水」

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

「初潮年齢が10歳未満の時は早発月経という。また、15歳になつても初潮がない時を遅発月経、さらに18歳になつても初潮がない時を原発性無月経といい——」

教師のコメント

保健体育のテストは1時間前に終わりました。

神山新一の答え

「さつきの問題わかつたんだけど言つていい?」

教師のコメント

駄目です

## 演奏と屋上と幼馴染

「さて、演奏するか・・・」

新一は演奏を始めた

「～～～～」

「ふう～ 何やつてんだろ？俺・・・」

「誰もいないと寂しいな～」

バタン！～

「～」

「誰よ？みんなが帰つているのに屋上で演奏しているのね～」

突然女子生徒が入つてきた。しかもかなり怒つている

「すいませんでした・・・」

新一は怯えながら頭を下げて謝罪した

「全く静かに帰りたかったのに・・・」

「姉上一体何があつたのじや？」

「黙つてなさい！秀吉」

「はい・・・」

秀吉は正座をした

そして・・・

新一も正座をしていた

「何であんたも正座をしてくるの?」

「はー! 体が勝手に・・・」

「全くあんたは・・・首に錠前なんか・・・付けて ん? 錠前?」

「あやか・・・」の鍵つて?」

「あ・・・その鍵俺のだ」

「・・・・・・・

「・・・・・・・

「・・・・・・・

「姉上ー(秀吉ー)」

「「新一イイイイイイイイイ」

「は、はー!」

「新一なのね（なのじやな）」

「あ、ああ・・・」

「4年ぶりね（じや）」

「4年ぶり……といふ」とは優子と秀吉?」

三

2

1

「久しぶり？」

「久しぶり・・・」

「帰るか・・・」「

新一はバイオリンをしまい・・・逃走を開始した

しかし・・・捕まつてしまつた

そして優子によつて・・・

アアアア

これは・・・聞かなくても分かるだろ？

「あんたは・・・なんで連絡をしないのよ」

「だつて・・・電話番号知らないし・・・優子さん何で笑つているのですか？」

「嘘はもう少し上手くなりなさいね」

「今のは・・・新一が悪いの」

今は帰り道・・・

「秀吉と優子はまだ」のクラスになるんだわ」

「姉上はやっぱりAクラスかの？」

「秀吉・・・あんたはFクラスじゃない事を祈るわ」

「で・・・新一はどこのクラスに入るのよ？」

「ん？・・・俺はFクラスに入るよ」頼んだ 学園長

「なんで？新一ならAクラスにあつさつ入れるの」

「新一なら簡単には入れるようなものなの？・・・何故じや？」

「俺は教師ならともかく・・・生徒として入つて来たんだ当たり前だろう。だから・・・振り分け試験は圧倒的に点差が付くからあと・・・試召戦争に参加も禁止されていている」

「2年生からでできる新しいシステムの事ね」

「考えてみろ・・・召喚戦争に出られない奴がAクラスにいたらおかしいだろう・・・」

「だから・・・Fクラスを使うわけだ」

「クラスの設備の変更時俺も必ず当てはまるわけだ・・・」

「戦争時は・・・俺は西村先生と同じ扱いとなるわけだ・・・あくまでも俺は戦死者を補習室送りにするだけだ・・・補習をするのは西村先生だからな」

「戦死したら・・・大変じやうつな」

「俺も召喚獣はあるのだが・・・条件を満たさないとできない」

「まず一つ俺の鍵前がはずしてある」

「次に西村先生が学園長の承認が無ければ出来ない」

「かなり不便じゃな・・・」

「仕方が無いよそれが・・・」の学園に入るための条件だから」

「で・・・アメリカで何をしていたの? (じゅ?)」

「え? 勉強ぐらいかな・・・」

「彼女はできていよね・・・」

「できる訳ないでしょ・・・友達もできなかつたのに・・・」

「何か色々じめんなさい (なのじゅ)」

「大丈夫・・・気にしていないから・・・はあ・・・」

「姉上よ・・・新一がかなり落ち込んでおるぞ」

「わかつて いるわよ」

「でも・・・優子がいれば別に寂しくない」

「そんなこと言われたら・・・恥ずかしいじゃない (ボソ)」

「何か言つた?」

「何でもないわよ」

「でも・・・優子とは友達より彼女の方が良いけど・・・」

「なつ・・・・・・・・」

「優子・・・顔が赤いぞ?」

「あんたのせこだらうがぁー！」

「秀吉と優子また明日」

「また、明日」

「わて、実家に帰るか・・・あつその前に買ひ出し行かなきや」

## クラスと天才と召喚獣

「おはようございます 西村先生」

「おはよう神山」

「先生も朝から大変ですね」

「ああ、そうだなどうせ・・・Fクラスの奴らはバカだからな 本当は俺が担任をやりたいところなのだが・・・」

「それは良い事ですね！私もそれが良いです なんせ・・・西村先生に鍛えてもらえたら自分もうれしいです」

「そういう事を言つてくれるのはお前ぐらいだからな」

「それでわ時間なんで お仕事頑張つて下さい」

さつき話ををしていたのは西村宗一先生周りからは「鉄人」と噂されている

趣味が（あだ名の元でもある）トライアスロンという超肉体派教師で、その鍛え上げられた筋肉は最低成績ですら普通の人間の数倍の怪力を持つ召喚獣と互角に渡り合い、明久の頭を片手で轟づかみにして振り回した拳句頭にヒビを入れるほどの力を持つ。レスリングの心得もある。

Fクラスの生徒が補習から脱走しようとするのを気配で感じ取るなど、人間離れしたスペックを有している。生活指導室を根城にしており、「規律を乱すものには鉄拳制裁」という教育方針から学園の

ほぼ全生徒に恐れられている。試召戦争の時は補習室の管理をしており、戦死者を「鬼の補習」によつて「趣味が勉強。尊敬するのは「富金次郎」という理想的な生徒に教育するという（この補習は拷問であると恐れられている）。

「そうだ！西村先生」

「何だ？神山」

「この手紙を学園長に渡してくれませんか？」

「内容は？」

「大した事ではありません ただ・・・自分も試召戦争に参加したいので参加時の点数の固定を申請したいと思います」

「その点数とは？」

「自分の現在の点数が大体2500なので・・・その5分の1で参加させて戴きたいと 自分も参加したいですから・・・」

「一応・・・出しておこう 本当は神山をAクラスに入れてやりたいんだが・・・大学を卒業していくそれで・・・Aクラスに入れたら試召戦争の意味が無くなるからと・・・学園長の考え方から仕方が無いな」

「いえいえ・・・自分がFクラスに入るのは仕方が無いです 大学を卒業して自分の願いでこの学校に入りたいと願つたのですから・・・自分もそのバカの一人ですから」

「せひ、せつせと教室に行け……」

「は」

そして新一年生の廊下に向かつた

「この感じ懐かしいな~小学校以来だ」

「わ~・・・教室に行くか」

「俺はFクラスの前にいるこれから1年間一緒になるのだから挨拶は肝心だな」

「おせよ~」

「早く座りやがれ」のウジ虫野郎

「・・・・殺す」

「いや・・・すまなかつた」

「問答無用」

そして・・・俺はウジ虫野郎と言つた奴をボコボコにした

「すいませんでした」

「分かればよし でも向で俺の事をウジ虫と読んだか言つてくれないか?」

「いや・・・それはだな」

「みんなおはよ～」

「えーと、ちょっとと通してもらえますかね？」

ふいには「こ」からはきのないこえがきこえてきた。そこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貪相な体に着た、以下にも冴えない風体のおじさんがいた。

「それと席についてももらえますか？H.R.を始めますので、どうやらこのクラスの担任みたいだ。」

「はい、わかりました」

適当に見付けた席に座った。

「えー、皆さんおはよ～」わざと一年F組担任の福原慎です。

よろしくお願ひします」

「なんで先生は名前を黒板に書かないんだろう？」

「チョークがないんじゃないのか？ってか、どうやって授業受けれるんだ？」

「あとでチョークと黒板消しを申請しちゃう」

「さて、皆さん卓袱台と座布団はありますか？不備があれば申し出てください」

先生がそう言うとクラスメイトの一人が

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんどは言つてないですー」

「あー、我慢してください」

「先生、卓袱台の足が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、あとで自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて隙間風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきました」

「あと皆さん、必要なものがあれば極力自分で調達してください」  
「これは、また酷いな… Aクラスとはえらい違ひだ。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

「ひひて、自己紹介が始まった。

以下省略

そこから・・・数日

Dクラスに勝利と荷物を破壊されるがBクラスに勝利・・・

そして・・・

放送であ〜Fクラスの神山新一君至急空き教室に来てください

「来たか・・・神山」

「はい・・・西村先生」

「これからお前には試召戦争の参加が下りた」

「と言つ事は・・・」

「お前の手紙が受理された」

「あつがとうござります」

「あつそくなのが神山の召還獣の運用試験をやつてもひつ」

「はい・・・では試験召喚『サモン』」

「手紙のとおり・・・全て500点に固定してある もで・・・動かしてみる」

「なかなか動かしにくいな・・・」

「大体やつていれば慣れてくる・・・そしてこれを使え」

「西村先生から鍵を受けとった」

「では解いてみる」

そして鍵を鍵穴に通しつリッターを外した

「神山は白髪になるのか・・・」

「いえいえ・・・」の姿の時は化物ですよ

「召喚獣は服装もかわるんですね」

「それは知らんかったな・・・」

数時間後・・・

「もう良いだろ?・・・鍵を付けて戻れ 次の試験戦争から参加できるからな」

「あつがとうございました」

「新一何かい」とあつたの?」

「ああ・・明久やつと自分の召還獣が来たんだ今度のAクラス戦が初陣だな」

## クラスと天才と召喚獣（後書き）

手紙の内容は

director Manabu  
Thought it is thought that I am  
an impossible asking because  
Shinichi Kamiyama wants to par-  
ticipate in the 「tameme」 war

It wants to ask for the point  
of the distribution examination  
of Shinichi Kamiyama and to  
ask to participate in the 「tam-  
eme」 war by 1/5 「nishite」.

The student in the educational  
institution, it is assumed that  
at it helps being possible to  
do.

学園長様

私、神山新一は試召戦争に参加したいがために無理なお願いだとは  
思いますが

神山新一の振り分け試験の点数を5分の1にして試召戦争に参加す  
ることをお願いしたいと思います

そのかわりに学園の生徒としてできる限りの手伝いをすることとし

ま  
す

## 主人公紹介（前書き）

東方ネタを入れてみる事にしてみました

## 主人公紹介

神山新一 17歳

文月学園二年Fクラス

首に錠前があるのが特徴

黒髪であるがリミッターを外すと白髪になる（例：男版 妹紅）

MITを四年で卒業（吉井姉とは知り合い）

小学校6年生の時アメリカに引っ越しMITを卒業した後…

即、文月学園に転入

特技

家事全般 勉強 お菓子制作 楽器全般

趣味

ゲーム 読書 演奏

好きなもの

優子 お菓子（苺系）姉

嫌いなもの

かぐや姫関係

現代にも生きる不老不死の人間 平安の世に生まれ姉と共に蓬莱の

薬を飲んだ

姉を探していたが見つかり（八雲紫にて幻想郷にいることが分かつた）

よく秋に筍を送つてくる

本当の名字は藤原 推定年齢1000歳以上

元は優子と同じ長い槍とバイオリンを持つているが・・・  
リミッターを外すと上はYシャツの下はお札付きもんぺを履いている

腕輪も使用可能

「凱風快晴」

自身の槍を上に投げて持つところに高速の蹴りを入れて飛ばし相手  
を大量に吹き飛ばす

## 番外編 新一の悪夢（前書き）

今回はとても書いてて胃が重くなつたお話を

## 番外編 新一の悪夢

午前四時・・・新一起床

「あ～眠い でも・・・昼の弁当作らなきゃ」

現在・・・新一は昔住んでいた家にいる（名義は新一の姉になつている）

本当は・・・親戚（そんなに知り合いで無い）がいるが自分の家が良いのだ

本人の寝床は現在自分の家の書物庫に当たる家の大図書館に当たるまだ・・・帰つて来てからそんなに経つていないので部屋がこの大図書館以外掃除がされていない（調理場と風呂場は除く）

制服に着替えて調理場に行く

「今日は優子に食べて貰つたために頑張つて作るぞ～」と、気合を入れてみるが実際他の人はあんまり新一の弁当を食べに来ないそれは・・・メンバーの大半が姫路の弁当を食べに行くのだから（本人たちは連行されている）

「今回も皆が食べててくれるよつに頑張らなきゃ」と女子みたいな考えの新一であった

「でも・・・いきなり優子に弁当を持つていつても困るだろうな・・・教室に着いたら秀吉に聞いてみよ」

「今日は重箱にじょう優子喜んでくれるかな～？」

新一は棚から3段重箱を取りだした

「さて、そろそろ……作らないと今回は料理本を基に作つてみよう図書館にも確か数冊有つたな」

「問題1玉子焼きにするか出し巻きにするか？」

「問題2何段田にご飯を用意するか」

「問題3カロリーに気を付ける」

あと、お菓子も作ろう

昔……ノリで買ったので（人生で家の知識は必須だつたので）家のサイズに比例してキッチンも大きい

「今日は玉子焼きにご飯はおにぎりにして3段田に詰めよう なんか……小学校に時に作ったお弁当みたい」

「あつ……その時も俺が作つたんだつた」

そう……実は小学校の時は姉の妹紅はある場所で勝負をしていた

それを最近知り合つた……八雲紫と名乗る大妖怪が言つていた

「姉上元気かな~まあ筈送つてくるみたいだから元気だらうな

先に言つておくが現在は……白髪モードだ（優子と秀吉は知らない）

「あと……お菓子は何を作ろう? 食後にケーキは重いからクッ

キーにしよう でも……Aクラスの皆さんの方も作っておひつFクラスの野郎どもには作るうつか悩むところだ

さて……作りますか

数時間後……

お弁当は完成1段2段はおかげで3段目がおにぎりだカロリーは大丈夫！ いとう……これでも栄養士の資格は取れるように研究されている

バイクの免許も取つてあるし……

「今度の休みはバイクの手入れもするか数年帰つていないと色々掃除が大変だな」

さてクッキーを作るか……

「大体……必要な分は昨日用意してある 昨日の帰りは荷物がすごかつたが」

数時間後……

クッキー完成 今回はソルトクッキーを作りました

そして時計を見る

「そろそろ……時間だな」

新一は重箱を風呂敷に詰め クッキーを袋詰めして学校に行く  
そして自分の首に錠前を付ける

そして・・・家の戸締りをしてから・・・学校に行く  
学校は勉強をするところなのでちゃんと授業には参加する  
そして・・・学校に着くと何時もどうり・・・西村先生が立っている  
「おはよう神山・・・Fクラスはビッグだ?」

「面白いですよ・・・朝焼いたクッキーをどうぞ」

「後でいだだく・・・ありがとうございます」

「後で職員室にも持つてきますので」

「他の先生にも渡すのか?」

「はい、先生方も今後ともお世話になりますし

「さうか・・・でも、どれだけ作ったんだ?」

「大体・・・400~500位ですかね」

「自分のクラスとAクラスにも持つていろいろかと・・・」

「来年は△クラスに行くかもしれないからな。まあ・・・神山の成績なら問題無いだろ?」

「では・・・先を急ぎますので」

新一は教室に向かった

「おはよう新一」

「おはよう新一」

「おは、明久元気か?」

「今日も元気だ」

「そんなお前に良い物をやろう」

「え?良いもの?なに?」

「クッキーをやろう」

「やったー」

「おはよう秀吉 ムツツロー 雄一 姫路さん 島田さん」

「おは」

「おは」

「おはよう」

「アサヒノヤ」

卷之三

みんなもケッキーをどうぞ

「おい！野郎ども！ケツギーをやるから欲しい奴は来る」

全職業の耳くね(?)

傳記文庫

卷之三

卷之三

新一は職員室にケッキの袋を持って向かった。

「どうぞ」  
一失礼します！ クッキーを持ってきました  
塙さんの分もあるので

「「「「「 気が利いてるな ありがと「」」」」

「いいえ、朝時間があつたので作つただけですから・・・それで失礼します」

「お昼にAクラスに行つてみるか・・・」

新一はFクラスの教室に戻った

「なあ・・・秀吉、優子は毎はAクラスの教室にいるかな？」

「姉上は教室にいると思うが・・・そんな事をを聞かなくても良いじやろ」

「いやあ~優子とお弁当を食べようと思つから・・・後、Aクラスにクッキーでも持つていこうかと」

「お主も大変じやのう・・・なかなかこんな時にしか勇氣が出なくて」

「仕方がないだろ・・・勇氣が出ないんだから そういえば・・・昨日姫路達とのお弁当余はどうだつた? 帰つてきたら皆死にそうな顔をしていたけど」

「セ二は気にしなくて良いのじや」

「でも・・・Dクラスに勝つたんだもんな俺も早く試合戦争やりたいよ」

「でも・・・お主参加できないんじや?」

「大丈夫こんな時の為に手は打つてある 次のBクラス戦が終わつた後に参加できるかもな・・・」

現在・・・Aクラスの前にいる 自分のお弁当とクッキーを持って  
Aクラスの扉を開けようとした時 前から黒髪ロングの女子生徒に  
声を掛けられた

「誰?」

「Aクラス代表の霧島さんで会つてゐる?」

「そうだけ?・・・何で私の名前を?」

「転入生だから各クラスの代表の名前は覚えるよつこと言われたか  
ら」

「そり?・・・誰かに用?」

「はい・・・木下さんいる?」

「ちょっと待つて 優子ちよつと来て」

「代表何か用? つて新一じゃない?」

「お皿一緒にどうがなと?」

「まあ・・・良いわ入りなさい そんな所にいたら通行の邪魔だし」

「やうだな・・・」

「優子どうしたのかな?」

黄緑の女子生徒が疑問に思つていた

「で・・・あんたのお弁当は持つてきっこな」

「ちやんと此処にあります

「何で重箱?」

「これなら・・・多人数でも困らないかなつて

「まあ・・・良いわ来なさい」

「ねえ・・・優子この子誰?」

「幼馴染よ 名前は・・・」

「神山新一だ ようじく

「僕の名前は工藤愛子ようじく で・・・僕は君の周りのお菓子の匂いが気になるのだけど

「いぢよつAクラス全員分は用意してあると・・・思つ 先に優子の分は渡しておぐ

俺は優子にクッキーを渡した

「ありがと」

「お弁当谢谢你」

「僕は新一君の弁当の中身が気になるな・・・」

新一は風呂敷を解き重箱を開けた

「気合入っているね なんか・・・運動会のお弁当みたいにこれ手作り?」

「うん・・・自作 優子に食べて貰いたいし」

「まあ・・・ありがとうございます」

優子が玉子焼きを食べた

「おいしく」

新一は胸を撫で下ろした

「ほっとした・・・優子におこしこって言われて」

お弁当を食べた後Aクラス皆は紅茶と一緒に自分が作ったクッキーを食べていた

「おこしこ」と女子から聞こえた

「つまご」と男子からも聞こえた

「優子からも聞けて良かつたよ作つたかいがある」

「ねえ・・・神山君は料理だけじゃなくお菓子も得意なのかな?」

「まあ・・・お菓子は大体作れるよ ケーキとかタルトとかシュー クリームとかも・・・」

「シュークリームも作れるの？僕シュークリーム大好きなんだよ」

「 そ う の か ． ． ． 優 子 が 良 い な ら 作 つ て こ よ う 」

私も良いけど……新一の作るお菓子また食べてみたいし」

「でも・・・少しかかるよ工房の掃除もしたいし流石に4年は長過ぎた」

「最近まで・・・アメリカにいたもんね」

「ああ・・・たしかバイトで小さなケーキ屋に入つてお菓子を作つてたら何故か有名になつた」

「そのお店の名前は？」

「確かに…グングールってお店だったかな？いきなりパーティシ工扱いになつて何でか？結婚式場のウエディングケーキまで作らされたつけような…」

「！？どうした？」

「グングールってあの・・・僅か4年で有名になつた

「なぜか・・・日本に帰ろうとしたら店長に泣かれた・・・レシピは置いといたけどとおどき大丈夫かなと思つ時がある

「グングールのケーキが食べれる

「こんなチャンスは無い」

俺は身の危険を感じた

「優子・・・俺そろそろ教室に戻るね」

ガシツ

「うやうやしく優子に捕まつたよ」

「ねえ・・・新一私お菓子が食べたいなあ

「まあ・・・優子が望むなら何でも作るけど・・・

「それに何で・・・新一皆はねお菓子を作つてほしいな」とお願いしている

「それはね・・・新一皆はねお菓子を作つてほしいな」とお願いしている

「流石に俺はそんなには作れない バイオリンの練習もあるし

「今度はシュークリームを作つてくれる・・・」

「でも・・・作る時は一人にしてね  
後、鍵を貸して」

「でもね・・・何故か女のプライドが許せないのだけど」

バタン！！

「しまつ・・・逃げ道を断たれた お願いだから大至急鍵を貸して」

「どうしてかな？」

「それは・・・必要だから」

「嫌と言つたら？」

優子が笑顔で近づいてくる

仕方無し

新一は窓に向かつて飛んだ

パリーン

新一が窓から落ちた

「「「「「逃がすな」」」」

「」のまま授業まで隠れるか Aクラスやばいよ」

そのあと新一はAクラスの捜索の末優子によつて確保された

かああああああ腕が痛いイイイイイイイイイイイイイイイイ

優子に関節を決まられた後 約束（脅迫）された 明日シュークリームを持つてくる事を

そのあと・・・帰つてから工房の掃除を開始した

「あ、疲れた」

「なに、疲れた顔してるのよ」

「はっ！ 誰だ」

「あんたが工房に来ても良いって言つたんでしようが」

「でも、一体どうせひつて

「あんたがくれた鍵を使つたら入れたわよ」

優子は首にかけてある鍵を新一に見せた

「ああ・・・そうだったな でも・・・よくあの鍵が家のマスター  
キーだと解かつたな」

「適当に使つたら開いたわ」

「はは・・・適当にね」

不法侵入とか突っ込みが入れれなかつた

「今からお菓子作るけど見ていくか?」

「どうせ・・・あたしの分は先に作つておいたんでしょ」

「詳しいな・・・一度も家に入れた事が無いのに」

「あんたの思考パターンは考えてある

「その自信は何処からだよ・・・」

「優子今から作るから鍵を貸して」

「何で鍵がいるのよ

「仕方が無いだろ、そうしないと上手くいかないんだから

「まあ良いわ・・・代わりにお菓子貰つても良い?」

優子が新一に鍵を渡した

「代わりに冷蔵庫にあるから好きな食つても良いぞ 紅茶もあるから好きな奴を飲むと良い」

「それじゃあ・・・取つてくれるね」

優子が冷蔵庫に向かつた

「俺は作業を始めますか 気が乗らないけど・・・一個ぐらいは余分に作るか」

新一が鍵を通して錠前を外した

「髪の色が変わるのはどうしたものか・・・昔は良かつたけど今は世間の目がなあ・・・」

「そんな事は後、後お菓子作りを始めるか」

そして・・・優子が良い顔で戻ってきた

「はあ～美味しかった そじらへんのケーキ屋のケーキより美味しかったわね」

「新一は頑張つていいかな～」

優子はスキップしながら工房に向かつた

「新一シユークリームは・・・？」

「おひ、優子どうした？」

「あんた・・・その髪」

「いや、何でもない・・・そうだ晩御飯食つていいくか？ どうせ晩飯一人だし」

「いや・・・今日は帰るわ 今さつきシヨツキングな出来事に遭遇しているから」

「なら・・・もつすぐ焼けるシュークリーム食べるか？」

「それは・・・食べるけど あんたの髪が白色の方が謎だわ」

「それは・・・また今度説明するよ」

最悪な事に優子に秘密がばれた事だ・・・

次の日・・・

昨日のとつづり・・・昼食時 新一は大量のシュークリームを持ってAクラスにいる

それは・・・優子含む工藤さん、霧島さん他にシュークリームとクラボックスを持ってきているからだ

「帰りづ・・・」

ガシツ

どうやら・・・優子に肩を掴まれたようだ

「……………」

「教室に戻るうかと…・・・自習をしたいし」

「ねえ・・・みんなどうやら新一が帰るうとしているんだけどうひ  
しようかな～？」

「……………え？何でかな～？」

「優子放してくれ・・・俺は帰るんだ教室に・・・

「今日も私とお弁当を食べたいから来たんでしょ」

「はい・・・・

「なら、入ればいいじゃない」

「いや、優子の邪魔をするのは失礼だし・・・それに」

「それに?何よ?」

「優子にあげるお菓子が・・・」

「……………お菓子が?」

「パフェになった

新一はク ラボックスから特製パフェを出した

「どうぞ・・・・・

「え・・・・? あたしこんなの一人で食べられない・・・

「回りの女子を集めて食べたら?」

「そ・・・そうねみんなも食べる?」

「「「「食べる」」」

男子より女子の方がよく聞こえた

こうした経緯で新一はAクラスのお菓子係に任命されたが・・・(本人はかたくなに断つている)処が優子を餌にしたら思う様に釣れた女子は歓喜に満ち溢れていた

番外編 新一の悪夢（後書き）

新一は優子の為にお菓子を作り続けるのか？

優子はお菓子の食べ過ぎで大丈夫なのか・・・

新一は何時優子に秘密を話すのか

お互いの気持ちは近くなっているのか？

次回はAクラス戦をかけるのかな？（b.y.作者）

## 俺との初めての試合戦争と理由（前書き）

かなり適当です

PV合計6000アクセス読んで下さった方ありがとうございました

感想とか色々お願ひします

主人公の苦手なものが考えていないので皆さんに募集します

## 俺と初めての試験戦争と告白

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能と言われていたのにも関わらずここまで来れたのは、ほかでもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

珍しく雄一が素直に礼を言つてゐる

「雄一、らしくないな」

「ああ。自分でもそう思つ。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」  
確かにここまで来れたのは俺たちだけじゃなく全員の協力があつてのことだ

「ここまで来た以上、絶対にAクラスに勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじやないといつ現実を、教師どもに突き付けるんだ！」

『おおーーー』　『うだーーー』

『勉強だけじゃねえんだーーー』

下がる予感がしないFクラスの士気。さすがだな・・・

「皆ありがとうございます。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着付けたいと考えている」

『どうこいつだ?』

『誰と誰が一騎打ちするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

机をたたき、皆を静まらせる

「やるのは当然、俺と翔子だ」

「雄一と翔子って知り合いなのか・・・・・?」

「馬鹿の雄一が勝てるわけなああつ!-?」

なんかカッターが飛んできたけど無視。

「次は耳だ」

「まあ、明久の言つとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえба  
勝ち目はないかもしけない」

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだつただろう?まともにやりあえば俺たちに勝ち目はなかつた。今回だつて同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れ。俺たちの勝ちは揺るがない」

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆さんに見せてやる」

『おおおーーーー。』

「じじても、相変わらずテンション高いな」のクラス・・・

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちはフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？なんの教科でやるつもりや？」

「日本史だ」

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は五百点満点の上限あり、召喚獣勝負でなく純粋な点数勝負とする」

「でも、同点だったり延長戦だよ？やつしたら問題のレベル上がるだろ？し、ブランクのある雄一には厳しくない？」

「確かにやつじやな

「おこおこ、あまつ俺を舐めるなよ？こくらなんでもやじままで運こ頼り切ったやり方を作戦などとこつむのか」

「ならどうするんだ？翔子の弱点なんてほとどじないだう

「ああ、やうだな」

「雄一。あまつもつたいたいぶるでな」。そろそろタネ明かししても良いじやろ？

秀吉がじびれを切らしてはなった言葉でクラスの皆も同意している

「ああ、すまない。つい前置きが長くなつた」

長すぎだ・・・

「俺がこのやり方を探つた理由は一つ。ある問題が出ればあいつは確実に間違えると知つていいからだ」

小学生レベルで間違う問題・・・?

「その問題は『大化の革新』」

645年、中大兄皇子が中臣鎌足とともに蘇我氏を倒したつてやつか「大化の革新? 誰が何をしたのか説明しろ、とか? そんな小学生レベルで出てくるかな」

「いや、そんな壇下げた問題じゃない。もっと単純な問題だ」

「何年に起きた、とかか?」

「『ビンゴだ新』。その年号を問つ問題が出たら、俺たちの勝ちだ」

ホントにこんな問題であいつが間違えるのか・・・?

明久でも間違えない・・・と思つたら明久が口パクで

『鳴くよウグイス、大化の革新』と言つていた・・・

「大化の革新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は明久で

すら間違えない

「いや、ここつゝ94年と思つていてだぞ」

「新一！なんじとを言つんだ！？」

明久が何か言つてきたがスルー

「…………さすがは明久だ。だが、翔子も間違える。これは確實だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばだ」

「そういう、雄二つて翔子と幼馴染？」

「ああ。そうだ。でもなんでお前が」「総員、狙え！」「なつ何故明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺がいったい何をしたと！？」

Fクラスの男子生徒はこういう時こそ力を發揮し、団結する

「遺言はそれだけか？・・・・・待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

いつの間にか明久が隊長になつてゐる

「あの、明久君」

「ん? なに、瑞希」

「明久君は私より霧島さんが好みなんですか?」

「そりゃ、まあ。美人だけど……」

「あと美波、どうして僕たちのまつに向かって教卓なんでものを投げよつとしてるの……?」

「まあまあ。落ち着くんじや皆の衆」

「唯一ともいえる常識人、秀吉が場を取り持つ

「秀吉……邪魔をするな」

「冷静になつて考えてみるがよい。相手はあの霧島翔子じやぞ? 男である雄一以外に興味があるとは思えんじやつが」

「むしろ興味があるとすれば……」

クラスの皆の視線が姫路に向く……昔、同性愛者とつづかれていた霧島さんにはあつたな…… 今もだが

だが、本来視線を向けるべき相手は雄一である

「な、なんですか? もしかして私、何かしましたか?」

「皆、いつものように嫉妬に怒り狂うのはわかるが、噂が噂だ。これはFクラスの数少ない女子生徒を守るために今回は明久にゆだね

てみないか?』

『…………今回だけだぞ』

そつ言ひて引きさがつてくれた。案外扱いやすいな、このクラス  
「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さじころに間違えて嘘を教え  
ていたんだ」

幼馴染といつワードにまた動きかけるFクラスの連中

「アイツは一度覚えたことを忘れない。だから今、学年トップの座  
にいる』

アイツも完全記憶能力か・・・・・?

「それを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は  
』

『システムデスクだ!』

「一騎打ち?』

「ああ。Fクラスは試合戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申  
し込む』

今回は雄一をはじめとした主要メンバーでAクラスに宣戦布告しに  
来た

「うーん、何が狙いなの？」

「そもそもって現在交渉中なのは優子。悩む姿も可愛い

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

「それにたかがゲームだぞ。命もかかわらないんだからいいだろ」

「…………いへら新一が言つても簡単には決められないわね」

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせるのはありがたいけど、わざわざリスクを冒す必要もないかな」

「懸命だな」

「ああ、ここからが本番だ

「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった?」

雄一は悪役顔して訊く

「時間はとられたけど、それだけだったわよ? 何の問題もないし」

秀吉の挑発にまんまと乗ったCクラスは昨日Aクラスに攻め込み、半日で決着がついた

「Bクラスとやりあう気はないか?」

「Bクラスつて…………。昨日来ていたあの…………?」

「ああ、アレが代表をやつているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされてないようだがさて、どうなる事やら」

「でも、BクラスはFクラスと試召戦争下から、三か月間準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずよね?」

試召戦争の決まりの一つ、準備期間。

戦争に敗北したクラスは三ヶ月の間、宣戦布告はできない。

自分から出来ないだけで、申し込まれたら戦争しなければならないこれは負けたクラスがすぐ再選を申し込み、戦争が泥沼化しないようにするための取り決めだ

「知つているだろ? 実情は『どうであれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』つてなつているつてことを。規約には何の問題もない。……Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

「…………それって脅迫?」

「人聞きが悪い。ただのお願いだ」

雄一が悪役になつたな。そういう仮面もあると便利だと思つが

「うーん。わかつたよ。何をたくさんでるか知らないけど、代表が負けるわけないもの」

あつたり返事をしてきたな……まあアレのクラスよりはまし

だろ

「だつて、あんなかつこうした代表がいるクラスと戦争なんていやだもん・・・・・」

「なあ明久、俺Bクラス戦出てないから教えてくれないか?」

「俺は明久に事実を聞いたら吐きそうになつた・・・

「でも、こっちからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、お互に5人ずつ選んで一騎打ち5回で3回勝つたほうの勝ちって言うのなら受けていいよ。あと、個人的なことだけど、私と神山の試合も入れてね」

「なるほど。姫路を警戒してるんだな」

「そうか。それなら条件を呑んでもいい」

「・・・・・雄二の提案を受けてもいい」

「あれ?代表。いいの?」

「・・・・・うん」

「・・・・・その代わり。条件がある」

「条件?」

「・・・・・うん」

うなずいて、たまたま雄一の後ろにいた姫路をじつへつと観察した

「…………負けたほうはなんでもひとつ言つ」とを聞く

翔子がそつ言つた瞬間、明久は姫路の前に立つ

「…………（カチャカチャ）」

康太、それはまだ必要ない

「面白そุดな…………優子、俺たちも負けたほうが一つ言つことを聞くことでどうだ？」

「べ、別にいいわよ？」

何故疑問形…………？

「じゃ、こつしょつ？ 勝負内容は5つのうち3つはそつちが、残り2つはこちらが決めるつてことにしてくれない？」

「交渉成立だな」

「そつだね。」

「…………勝負はいつ？」

「十時からでいいか？」

「…………わかつた」

「よし、こつたん教室に戻るが」

「ほかの誰に報告しないといけないからな」

「わざと、俺たちは教室に帰つていつた

「では、両名共準備はいいですか？」

場所は変わり▲クラス。試験戦争の立ち会いは▲クラス担任の高橋

先生

「ああ」「…………問題ない」

「それでは一人田の方、どうぞ」

「アタシから行くよ」

いきなり優子か、なら俺しかいないじゃないか

「これなつとはせつかちだな」

「いいじゃない。ヒジハヤ秀吉」

「なんじや？姉上」

「ヒクラスの小山をなんつてしまふ？」

「はい、誰じや？」

ヒクラス・・・・・小山・・・・・ハツ

「じゃーいいや。その代わっこつよつち来てくれる?」

「うん? ワシを廊下に連れ出しちばりあるんじゃ 姉上?」

「秀吉・・・・・生きて帰つて!」

心からのい眞福を祈る・・・・・

『姉上、何の用 えりしてワシの腕をつかむ?』

『アンタ、じクラスで何してくれたのかしら? えりしてアタシがじクラスの人たちを膝呼ばわりしてることになつてるのかなあ?』

『はつはつまつ。それはじやな、姉上の本性をワシなりに推測して、あ、姉上つーちがつ、その関節はさつちにま曲がらなつ・・・・』

・・・・・優子が帰つてきた、そりやもうすがすがしい笑顔で

「秀吉は急用ができたから帰つてしまつ。さあ始めましょ」

「わづだな、ホントにお前と戦つ口が来るとはな・・・・・

「そうね。確かになかつたわね」

「ホントはAクラスを落とすのに気が引けだけどな・・・・・お前と戦えるつてことが何より楽しみだつ」

「ふふふ・・・・・やあ勝てるかな?」

「教科はどうしますか？」

「数学で」

「ちょっと、アタシの得意教科じゃない！！」

「俺はどの教科も変わらないからこれでいいだろ」

「では召喚を開始してください」

「「試験召喚」」

優子と新一の召喚獣は西洋風の鎧と槍だった。

『Fクラス 神山新一 数学500 VS Aクラス 木下優子  
数学 449』

「始めから飛ばしていく！－！」

そんな攻防がしばらくの間続き、2人とも徐々に点数を減らしていった

『Fクラス 神山新一 数学10 VS Aクラス 木下優子 数  
学 9』

「初めてだから使いにくいな……本気も出せないので」

「アンタ……初めてでこの動きは凄すぎるわよ」

「行くぞ」

「来なさい」

グ  
サ

優子の槍が俺の召喚獸の胸に刺さり消失しその瞬間新一が氣絶した

「試合戦争はどうなつてゐる?」

「せつせつ戦目が終わつて」これから4戦目よ」

「そうか…・・・・・」

「雄一、負けちまつてすまねえな」

「ん、新一か。気にしなくていいぞ。俺たちもいいもの見せてもらつたしな。それと、もう大丈夫なのか？」

「ああ。迷惑かけたな」

「その言葉はあいつの彼女に言つてやれ」

そう言つて優子のほうを指す

「そつだな。で、今どうなつてるんだ？」

「ああ、お前のあと、明久が普通に負けて、姫路が久保に勝つて1

「2つてこいだ」

「そりか」

「では4人目の方どうぞ」

「……（スック）」

高橋先生の「ホールで康太が立ち上がった

今まで教科選択権はまだ1回、ここでこれが生きてくる。

康太は総合点数のうち8割が保健だからな

「じゃあボクが行こうかな」

対するAクラスは愛子が来るようだ

「1年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

見たことないやつも多いのだろうか、自己紹介されてもピンとこないようだ

「教科は何にしますか？」

「……保健体育」

「土屋君だつけ？随分と保健体育が得意みたいだね」

康太の実力を知らないのか、愛子は余裕っぽいな

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？…………キリヒと違つて、実技で、ね」

問題発言により騒ぎ立つFクラス陣。…………実技をサッカー、野球とか運動のほうで誰一人捉えないつてのも不思議だな

「そつちのキミ、吉井君だつけ？勉強苦手そつだし、保健体育でよかつたらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「そろそろ召喚してください」

「はーい試験召喚<sup>サモン</sup>つと」

「…………試験召喚<sup>サモン</sup>」

康太の召喚獣は小太刀に忍者装束、愛子のほうはセーラー服に斧を装備していた

「実践派と理論派は、どっちが強いか見せてあげるよ」

言い終わると同時に愛子の召喚獣は腕輪を光らせながら動いた。

斧に雷撃をまとわせている

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーーくん

今にも斧が当たると思った時…………

「……………加速」

康太の召喚獣の腕輪が輝き、超高速で動き出す。

しつかり姿が見えてるのは俺と優子くらいじゃないだろ？

「…………え？」

愛子の戸惑った顔

「…………加速、終了」

ぼそりと康太がつぶやく

そして、愛子の召喚獣から血が噴き出した

『Fクラス 土屋康太 保健体育 572 VS Aクラス工藤愛  
子 保健体育 446』

さすがだな・・・・・500点越えとは

「これで2対2です。最後の一人、どうぞ」

「…………はい」

Aクラスからはもちろん翔子

「俺の出番だな」

Fクラスは雄一。こいつしかいない

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方程式は百点満点の上限あります！」

雄一の発言で△クラスが揺れる

『上限あります？』

『しかも小学生レベル。満点確定じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ・・・』

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。  
少しこのまま待っていてください」

高橋先生が教室を出ていく。

俺は自然と雄一のところへ向かう

「雄一、後は任せたよ」

明久が雄一の手を握る

「ああ。任せられた」

「・・・・・・（ビックリ）」

康太が歩み寄りピースを雄一に向ける

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「…………（フツ）」

康太は口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻った。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。明久のことか。気にするな。これからも幸せにな」

「はいっ」

「雄一、勝つてこいよ」

俺は一言だけ伝える

「ああ。お前にもいろいろ助けられた。後はまかせとけって」

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

戻ってきた高橋先生が2人に声をかける

「…………はい」

「じゃ、行つてくるか」

「これすべてが決まる……」

「皆さんはじめでモニターを見ていてください。」

『では、問題を配ります。制限時間は50分。満点は100点です。』

『不正行為等は即失格になります。いいですね?』

『……はい』

『わかつてゐるぞ』

『では、始めてください』

『これで、あの問題が出ていなかつたら俺たちの負けだ

『次の（ ）に正しい年号を記入しなさい』

・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・

・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・

（ ）年大化の改新

「あ・・・・！」

「出たな・・・・」

「うん、これで僕たちの卓袱台が

『システムデスクに！』

「最下層に位置した僕たちの歴史的勝利だ！」

『つおおおおおー..』

『日本史限定テスト 100点満点』

『Aクラス霧島翔子97点 VS Fクラス坂本雄一 53点』

俺たちの卓袱台が・・・・ミカン箱になつた

「3対2でAクラスの勝利です」

高橋先生の宣言が容赦なく俺たちに突き刺さる

「・・・雄一、私の勝ち」

「・・・殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやるー・歯をくいしばれー..」

「吉井君、落ち着いてくださいー・坂本君にはこれまでがんばつてくれたんですから私の（失敗）料理をあげるんですつー..」

姫路、お前が落ち着け

「だいたい53点ってなんだよー。0点なら以前の書き忘れとか考えられるのにこの点数だと」

「いかにも俺の全力だ」

「「」の阿呆があーつー」

「アキ、落ち着きなさいー。アンタだつたら30点も取れないでしょうが！」

「「」の馬鹿には喉笛を引き裂くといつ体罰が必要なのにー。」

「それって体罰じゃなくて処刑ですー。」

「・・・・・・でも、危なかつた。雄一が初戦小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

図星かい

「・・・・・・ヒジヒジで約束」

「あ、アタシのもね」

戦いに熱中しすぎて忘れたな・・・・でも大体分かるんだけどな

「・・・・・・（カチヤカチヤカチヤー！）」

康太、こういつときは行動力あるよな

「わかっている。何でも言え」

「うなると雄一は潔いな

「…………それじゃ

明久が姫路の前に出る

翔子は小さく息を吸つて

「…………雄一、私と付き合つて」

おお一言つたが。やつぱりそう来たか

「やつぱりな。お前、まだ諦めてなかつたのか」

「…………私は諦めない。ずっと、雄一のことが好き」

「その話はなんども」とわつただり?ほかの男と付き合つ坂はないのか?」

「…………私には雄一しかいない。ほかの人なんて、興味ない」

あの噂は翔子が雄一が好きだから雄一の周り異性が気になつたからか

「拒否権は?」

「…………ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあつー放せーせーやつぱーの約束はなかつた」とい

「

翔子は雄一の首根っこをつかみ、教室を出て行った

・・・・・今度は俺の番か

「で、優子はまだあるんだ?」

「えーっと・・・・・の・・・・・

「じやあ、お互に回避してみるか・・・・・

「こいつとかにならぬほど優子って引っ込むんだよなー

「・・・・・・・

「せーの

「こいつ言つてない言葉なんてあと一つしかない・・・・・

だから精一杯この言葉を・・・・・

「結婚しよう(しまじょう)優子(新一)」「

「――――――――――――――

「ばー、あー恥ずかしい・・・・・

「とこつても今すぐは無理だからとつあえず婚約で止めとへか

「そうね」

「さて、Fクラスの監、お遊びの時間はここまでだ」

ふと、扉のほうから鉄人こと西村先生の声が・・・

「あれ？ 西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補修についての説明をしようと思つてな」

・・・・まさか

「おめでとうお前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一念、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいっ！？』

クラスの男子から叫び声が上がる。なんせ、相手は鉄人だものな

「いいか。確かにお前たちはよくやつた。Fクラスがここまで来るのは正直思わなかつた。でもな。いくら『学力がすべてでない』と言つても人生を渡つていく上で強力な武器の一つなんだ。全てではないからといって。ないがしろにしていいものじゃない」

正論言われてるから誰も言い返せない

「吉井。お前と坂本はとくに念入りに監視してやる。なにせ、開校以来の『観察処分者』とA級戦犯だからな」

「やつはこきませんよー何としても監視の目をかいくぐって今まで  
より楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「…………お前には悔いを改めるとこいつ発想はないのか？」

あつたら明久じゃなくなると俺は思つ

「とりあえず明田から授業とは別に補修の時間を2時間設けてや  
う」

・・・・・明日からか・・・・なり今日は何もないな

「今日は私と映画を見に行かないか？俺が奢るから来るか？」

「行くよ新一 ポップコーンとか買つてもいい？」

「それは良いが……姫路と島田も来るか？」

「はい。行きます」

「つとも行くわよ」

「なら、1人一緒にさせてもらいましょ」

「優子との初めての作業だ。明久も準備はいいか？」

「うん」

俺たちの後ろにはFクラスの連中が・・・・・

『もつ我慢できねええええ』

と叫びだした。俺は優子をお姫様だっこして窓から逃げだす

「新一、恥ずかしいわよ／＼／＼／＼

『神山も坂本も彼女作りやがって・・・・・・・・・・』

『コロス！コロス！コロス！』

『諸君、男とはなんだ？』

『愛を捨て、哀に生きるもの…』

『よろしい、なうばあの異端者を追ええええええ』

『うおおおおおおお…』

俺の逃走劇が始まった。

## 俺と初めての試合戦争と結婚（後書き）

現在・・・もう一人オリキヤラを考えています  
久保タイプの男子を考えています

映画館つて最近行つてないな・・・（前書き）

今回、自分は一体何がしたいんだろ？～b y 作者

映画館つて最近行つてないな・・・

試合戦争を終えた僕は、鉄人の陰謀（？）によつて美波と姫路さんの3人で映画館に来ている。

僕の意見は何も通らず、気付けば週末にも3人で映画を観に行くことに……

どうしてこうなつた！？

チラツと後ろを見てみると、美波と姫路さんは楽しそうに話している。

まあ、あの楽しそうな2人の姿を見る為の投資と思えば安い……何つ！？

『一般1800円、大学・高校生1500円、小・中学生1000円、幼児（3歳～）900円、大金持ち75890円、酔っぱらいお断り、団地妻OK、現地妻OK、イチャつくのは程々に……』

映画館の受付前に掲げられているボードを見て驚愕する。

さうして視線を横の売店に向けると

『「一ラムサイズ300円、ポップコーン5サイズ400円……』

絶望した！映画館の物価の高さに絶望した！－

学割があるとはいって、チケット一枚1000円、飲み屋と食べ物で700円の計1700円、3人分だと……

映画館、なんて恐ろしい場所なんだ！僕が行くなら新一が居ないと絶対無理だ

「よ、吉井君」

「な、何？姫路さ」

「これ、見ませんか！」

「へえ～、いいんじゃない。これにしようよ、アキ」

姫路さんが指差したのは『世界の中心で僕の初恋2』といつ作品だ。

所謂、ラブストーリー物だ。

「そ、そつ……じゃあ、僕は何でも良いから……」

少しでも新一が来ないと僕の野口さんが犠牲に……

「「何でも良いの? (ですか)?」」

「じゃあ、アニメにする?..」

美波が指差したのは『劇場版・ダメな勇者と頑張る魔王』……つて、観る作品が問題じやないんだよ!

「こや、そういうのではなく

「観念するんだな、明久」

後ろから聞き覚えのある声が……

「こ、ここの声は!?

「男とは……無力だ」

後ろを振り向くと、鎖に繋がれた手枷をした雄一と鎖を両手で握りしめる霧島さんがいた。

それ、なんてフレイ？

「ゆ、雄一？」

その哀れな雄一の姿に動搖する僕をよそに、2人は何を観るか話し出す。

「……雄一、どのが観たい？」

「早く自由になりたい」

「……じゃあ、『地獄の默示録・完全版』」

「おい待て！それ3時間23分もあるぞ！？」

「2回観る」

「1口の営業より長いじやねえか！？」

「……授業の間、雄一に会えない分の……埋・め・合・わ・せ（ボ

۶۷

「やつぱ帰る」

雄一は手枷をしたまま、鎖を引き摺りながら帰らひつとするが

「……今田は帰らない」

霧島さんがスタンガン（ビニから取り出したんだ！？）を手に雄一に襲いかかる。

バチバチバチバチ……

「な、なんだ翔子！？それ、な、あべし、や、ひよ、や、ば……」

避ける間もなく、スタンガンをくらつて黒口ゲになり、氣を失う雄一。

そんな雄一を霧島さんは受付まで引き摺つて行き

「……学生2枚、2回分」

「はい学生1枚、氣を失った学生1枚、無駄に2回分ですね」

チケットを購入するのであった。

受付のお姉さんはそれでいいの！？

手枷にスタンガンだよ！

いくら犠牲者が雄一だからとしても、そこまで営業スマイルを貫けるものなの！？

「仲の良いカップルですね」

「憧れるよねえ」

その様子を見た美波と姫路さんは、田をキラキラさせながら羨ましそうに2人を見送る。

……眞、何か違うと思つよ。

それにしても、霧島さんってあんなにも過激だったんだね。

「アグレッシブだな霧島さんは」

ん？今度は……新一と木下さんか。

2人は仲良さそうに立ち並んでいて、手を繋いでいる。

……いや、雄一達が普通じゃないんだよね。

「私のアドバイスのおかげね。きちんと実践できるんじゃない

「優子、霧島さんに変な事教えるなよ。」

「大丈夫よ。教えるとしても、法に引っ掛からない事を

「そこ」の2人ダウト！高校生のする会話じゃないよ…」

君達は一体何を知ってるの！？

「神山君と木下さんは何を観るんですか？」

「ウチも気になるー何かオススメある？」

「私の」とは優子って呼んで。私も2人のこと名前で

ああ、美女が3人揃うと絵になるなあ。

3人が楽しそうに話し込む姿を眺めていると、新一が僕に近寄り小声で話しかけてきた。

「（明久、話しがある）」

「（どうしたのさ新一？）」

「（一緒に『愛と約束の物語』を観るよひよしてくわ）」

「（本当にー？……でも、どうしてー）」

僕としては助かるけど、なんで新一はそんなことを提案してきたのだろう？

「（俺と優子もその映画を観るんだが……頼むー）」

僕に訴えかける新一の顔は本気だ。

「（やがて今とポップローンを奢ってくれる約束）」

「（最大サイズで奢るー！これで交渉成立だー）」

よしー・カロリー GET !!

「（……でもさ新一、せつかく2人きりになれるチャンスなのにいいの？）」

試召戦争の一騎討ちで負けたせいで付き合うことになつたとはいえ、もともと相思相愛だつたみたいだし、僕達はいない方がいいんじやないの？

「（構わん明久、お前は優子の恐ろしさをわかつていい……）」

試召戦争で充分に恐ろしい人だつて実感したけど……

「（暗がりで2人きり……何をされるかわからん！）」

生徒達がいる中で、お互に告白をする人だもんね。

あれは確かに恥ずかしいと思つよ。

まあ、新一も新一で苦労してることだね……

「（新一、頑張れ……）」

「（明久、お前もな……）」

こいつじて『恋と約束の物語』を眞で観たんだけど、不覚にも泣いてしまった……

「う、恥ずかしい（／＼）

映画館つて最近行つてないな・・・（後書き）

今度こそオリジナルを・・・決めよう  
感想お待ちしています

清涼祭って何だらう?・それって美味しいのか? (前書き)

いつも・・・久しぶりです  
いや〜受験がありまして忙しかったのです  
久しぶりの更新は疲れる

口つきゅーぶのゲーム長いね・・・

清涼祭って何だらう?・それって美味しいのか?

桜舞散る中に忘れた何かがあるかもしけんが、桜のシーズンが終わり新緑が芽吹き始めた今日この頃、皆様お元気ですか?

俺の通う文用学園は、年間通して最初の行事である『清涼祭』の準備を始めている。

教室の改造、調理器具の手配、展示の準備、リハーサル……

学園祭準備の為、ロングホームルームの時間はどの教室も活気が溢れています。

「吉井!-こいつ!-」

「勝負だ、須川君!-」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる!-」

我がFクラスも校庭で野球をするぐらいに、活気が溢れていた。

これぞFクラスクオリティ!

「貴様ら、学園祭の準備はビビりした！サボるんじゃない！」

「「「鉄人！？」「」」

障害物を蹴散らす勢いで西村先生が校舎内から走ってきた。

その声と姿に気付いた瞬間、脱兎の如く逃げ出すFクラスの生徒達。

勉強は三流以下でも、逃げ足は超一流だ。

「頑張れ！」と、俺はFクラスの馬鹿共を捕まえる西村先生を外を見ながら応援していた

え？俺、いやいや面倒だし……

他に教室に居るのは……姫路・島田・木下それだけだ

「早く来いよ～逃げて無いで」

「あつ・・・捕まつた」と、外を見ながらだるそうに・・・実況していった

「そろそろ・・・来るか」俺は席に着いた

「そろそろ『清涼祭』の出し物を決めなくちゃならんのだが、議事

進行並びに実行委員長として誰かを任命する。そつに全権を委ねるので、後は任せた」

心の底からひいひでも良こと思つてゐる坂本の奴。

やる気が全く感じられない。

「吉井君に神山君。坂本君つて学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

「直接聞いたわけじゃないからわからないけど、楽しみにしているつてことはなさそうだね。興味があるのならもっと率先して動いていふはずだから」

「見た感じやる気がないのは確かだと思つ」

「わつなんですか……寂しいです……」

明るい姫路の表情に少し翳りがさす。

何かいつもと違つてみつな……

「吉井君も興味がないですか？」

「うへん、どうだり？別にやるまでもやつたいてわけでもないしな  
あ」

「私は……吉井君と一緒に、学園祭で思に出を作りたいです」

「ほえ？」

意味深な台詞だな……

先ほどの表情といい、今の台詞といい、姫路さんに何かあったのか？

それとも俺の思い過？」しか？

「その、吉井君は知つてますか？うちの学園祭ではとつても幸せな  
カップルが出来やすいつて噂が……ケホケホ」

また咳き込んだか……

最近、姫路さんが咳をする姿をよく見かける。

「大丈夫、姫路さん？」

「は、はい。すいません……」

「姫路、そういう時はお礼を言つてくれた方が嬉しいんだぞ」

少し苦しかったのか、若干目が潤んでいる。

やはり体の弱い姫路には、設備ランクを更に落とされたFクラスの教室は毒でしかないな。

腐った畳も酷かつたが、今は傷んだ座だから不衛生極まりない。

「吉井君、心配してくれてありがとうございます。でも大丈夫ですから……」

なるべく早い段階で衛生的な環境と体に負担をかけない設備を用意しないと、姫路さんはいつか倒れてしまう気がする。

Fクラスの試合戦争解禁までは、まだ2ヶ月ぐらいある……

何か良い手はないか？

「んじゃ、学園祭実行委員は島田といつ」といいか？」

「え？ウチがやるの？ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

考えるのは後にしても、学園祭についての話し合いで俺も参加するか。

いつまで経っても終わらそうにならないからな……

「雄一、実行委員なら美波より姫路さんが適任なんじゃないの？」

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いてくるつむにタイミングアップだ」

「雄一の言う通りだな。姫路だと少数派の意見を切り捨てたりもできないうだろ。それが例えバカな意見だつたとしてもだ」

普段ならそれは姫路の美点になるが、一いつ時には仇となる。

この場合、気の強い島田の方が適任だ。

「それにねアキ。瑞希も召喚大会に出るのよ

「え？ そうなの？」

「はい。美波ひやんと組んで出場するつもりなんですね」

小さな手をぎゅっと握り締める姫路。

「学校の宣伝みたいな行事なのに。2人共物好きだなあ

宣伝そのモノだと思ひづ。

世界的に注目されている『試験召喚システム』を世間に公開する場として、清涼祭の期間中に『試験召喚大会』が催されるんだが、正直言つて密寄せパンダ的なイベントにしか見えない。

まあ、別にいいけど……。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希つてば、お父さんを見返したいって言つてきかないんだから」

「お父さんを見返す?」

「姫路さんはお父親に何か言われたのか?」

「家で色々言われたらじいわよ。『Fクラスのことをバカにされたんです!許せません!』って怒ってるのよ」

よくある話だな。

「姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって、監のことを何もわかつていなければ、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？許せません！」

そういうことが・・・

「そういうことでFクラスのウチと組んで、四駆大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

せっかくやる気になつているんだが、それじゃ意味がないと思つた。

直接言つのも気が引けるから、影で何とかするか・・・

それに、姫路の父親の性格を勝手に推測すると、このままじゃ姫路さん自身の転校つてこともあつそうだな。

はあ、また一つ考えることが増えてしました・・・

問題は山積みだ。

「話を続けていいか？」

雄一はやつやと終わらせたいんだりうな。

「じりん、じりん」

「島田が迅喚大会に出るから無理と書つなら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろ?」

「副実行委員次第でやつてもいいけど……」

その瞬間、島田の目線が明久に向いたのを俺は見逃さなかった。

ならばいいとするまでだ!

「雄一、まずは皆に副実行委員の候補を挙げてもらつて、その中から島田に2人を選んでもらい決戦投票するつのはどうだ?」

「よし、それでいい」

やつひとつと、教室内から推薦の声が聞こえてくる。

「吉井が適任だと思ひ」

「吉井はやはり吉井がやるべきじゃないか?」

「吉井にやつてもうつた方が……」

「吉井以外に考えられない」

さすが皆わかっているな。

「はい、そこまでーそれじゃ決戦投票の人物を今から黒板に書くぞ！」

島田に小声で言い聞かせ、俺は黒板に決戦投票候補者の名前を書いた。

島田に選ばせないのかって？

細かいことを気にしてるとハゲるぞ。

カリカリカリカリ……

サクッと書き終え、書いた候補者の名前を読み上げる。

「候補1は吉井。そして候補2は明久だ。皆、どちらが良いか選んでくれ」

「ねえ雄二、新一の候補の挙げ方は明らかにおかしいよね？」

「そうか？」

「どうするへ、どうが良いと思つ?」

「やうだな……どちらもクズには変わりないんだが……」

「どっちのクズを選べばいいか……意外に迷うな?」

「皆つ! 真面目に悩んでいるフリをするんじやない! あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするな! この人間のクズ共が!..」

お前もしつかり『クズ』と言つてゐるじやないか。

「投票の結果、明久に決定した。後は2人に任せる」

とりあえず、これで俺の仕事は終わりだ。

我ながら良い仕事をした。

「ほりほり、アキつてば。そんなことより、ウチとアソンタでやる」とに決まつたんだから、前に出て議事をやらないと

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引いてる気がするよ……」

島田に促された明久は、渋々と前に出て行ったのであった。

因みにな、貧乏くじを『引いてる』んじゃなく俺達が明久に『引かせている』んだが。

明久達と入れ替わり席に戻る俺と雄一。

「ウチは議事進行をやるから、アキは板書をお願いね

「ん、了解」

「それじゃ、ちやつちやと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる?」

さて、Fクラスの奴らからはどうなアイデアが出るか?いや、……

期待半分の不安半分だな。

清涼祭つて何だらう?・それつて美味しいのか? (後書き)

また・・・更新は遅いですが頑張ります

次回は清涼祭の準備で事件

Aクラスに誘拐される新一

訳も分からず優子から渡されるそれは執事服

Fクラスは一体どうなるのか?

そして・・・新一は学園長から呼び出しが一体何があつたのか

すいません・・・調子に乗りすぎました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4044w/>

---

バカと天才と音楽家

2011年11月20日13時59分発行